

仙台教区 復興支援活動ニュースレター

4→6・45通信

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL 022-222-7371 FAX 022-222-7378
義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局

新年のお喜びを申し上げます

仙台教区サポートセンター長 平賀 徹夫 司教



今年の3.11で、丸5年を迎えます。

仙台教区全域に及ぶ東日本大震災を体験し、無我夢中で復興支援活動をしてまいりました。しかし、2015年は「風化」という言葉がよく聞かれた1年でもありました。

確かに、ボランティアに来てくださる方も減少し、春休み、夏休みなどを利用してベースに来てボランティア活動を続けてくださっていた大学生も、大学を卒業し、社会人となり、心ならずも被災地から遠のいて行くという傾向が続いています。

東北に住む人々は地元の新聞やテレビなどで復興はまだまだ、ということは実感しています。しかし、東北地方以外の地域には、この被災地のニュースを扱うメディアはほとんどありません。

その中にあって、小教区の信徒たちが、仮設住宅での「お茶っこ」傾聴活動を続け、仮設住宅から復興住宅への移行期を迎え、現在、暗中模索をなさりながらも、被災した方々に寄り添ってくださっていることを私もよく知っています。

被災者の方々が、活動を終えて帰って行くボランティアさんに、「私たちに忘れないでね」とかける言葉に、この方々のさびしさ、不安などがにじみでていると感じています。

今年の4月からは、「新しい創造計画」も第4期に入ります。もうすぐ、この計画も発表できるでしょう。

昨年1年間の皆さまの働きに感謝申し上げるとともに、今年も、心を一つにし、力をあわせていきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

皆さまの上に、神様の豊かな祝福がありますよう祈っております。

~~~~~  
今回は、八木山オリーブの会の亘理町での仮設訪問と、東仙台教会の阿部正子さんが帰省時に九州で出会った紙芝居について、そして神奈川県鶴見教会から東日本大震災被災者救援の街頭募金を行った様子と、仙台や宮城県内の仮設住宅でお茶っこを中心として被災者に寄り添う活動が続いている小教区の担当者が集まり、仙台市の保健師の方からお話を聞く会がありましたので、その様子をご紹介します。

## カトリック鶴見教会 街頭募金活動

カトリック鶴見教会 福祉部 松橋 和行

12月13日、仙台教区サポートセンターから送っていただいた写真を使って、鶴見駅前で、東日本大震災被災者救援募金を行いました。当日はあいにくの冷たい雨でしたが、BS723団及び教会学校の子もたちの応援もあり、無事終わることができました。

11時から13時までの2時間実施の予定でしたが、雨が止みそうもなかったため、30分早く切り上げました。昨年は晴天に恵まれ(というより、雨に降られた経験は今までなかったです)、

約22万円という結果でしたが、今年は30分短くなったうえ、雨天ということもあり、大幅に少なくなったのではと心配していましたが、約17万円集まりました。

募金して下さった方に感謝するとともに、写真の提供を快諾していただいたサポートセンターの皆様に深く感謝申し上げます。

いったん通り過ぎてからわざわざ戻って来て募金してくれた女子高生、教会学校やBSの子もたちの頭をなでながら募金してくれたおばあさん、小さい子どもにお金を持たせて募金してくれるお母さん、とにかくいろいろな方が募金してくださいました。神に感謝です。

先日、カリタスジャパン本部事務局に「東北地方太平洋沖地震」と明記して送金しました。いくらかでも被災された方々のためにお役に立てれば嬉しいです。



雨の中、合羽や傘を差しながら、募金の呼びかけをする鶴見教会の教会学校の子もやBS723団の子もたち

## 旧館集会場サヨナラカラオケと 新たな仮設集会所での生け花・お茶会

八木山オリーブの会 野田 和雄

2015年11月25日、この日が亘理町旧館仮設住宅集会場を使う最終日となりました。4年近くお世話になった集会場とのお別れです。この日は、八木山オリーブの会主催のカラオケが賑やかに行われました。

約20名の参加者全員が、復興住宅から仮設集会所へと通ってきます。これまでに89回もこちらの仮設住宅を訪問していることから、参加者とオリーブの会メンバーはすっかり仲良しです。スタッフを含めて30名ほどが、カラオケの選曲や食事の準備をしながら再会を喜びました。

カラオケは、機材を地元業者からレンタルしたため、選曲などは皆さん手慣れたものです。音量の調整をしている間に歌い出す人や、しっとり演歌の中に、デュエット曲で盛り上がる組。扇子とたすき掛けの応援団も加わり、徐々に盛り上がってきました。

そんなとき、メキシカンステージ衣装に身を包んだホセ神父様が颯爽と登場。テンポの速いリズムと明るい歌声が響くと、場の雰囲気が一変しました。盛り上げ隊も踊り始め、手拍子に加わり、合唱となり、笑顔が広がっていきます。艶歌、シャンソン、流行歌など、次々と芸達者の歌い手が出てきます。歌う心も様々で、しっとりと聴かせる人、激しく絶唱する人、リズムに合わせて踊る人、ご当地に歌詞を入れ替えウケる人、盛り上げるのが巧い人など、タレントがたくさんいます。



ホセ神父様の歌で皆さん大盛り上がり

最後は全員で、「花は咲く」を合唱して、旧館集会場にお別れしました。その後は、楽しいお昼を共に食べながら笑顔がほころびます。新しい街や自分の家の事など、自然に話が出て、久しぶりに笑ったという人もいました。あたたかい味噌仕立ての鍋を食べながら、新しい生活に向かう力をもらっているようでした。

次回のポスターやイベントの申し込み書を配り、新しい街の仲間も連れて来てくださいと再会を約束し、お別れしました。

復興が進む亘理町では、被災者が入居できる復興住宅が完成する一方、仮設の集会場が次々に閉鎖されています。その影響から、これまで利用していた旧館仮設住宅集会場から亘理町公共ゾーン第3集会所へ場所を移して仮設訪問を行うことになりました。

初めて訪れる場所のため、これまで行ってきた催しの中での経験を活かせる生け花を選び、参加の呼びかけをしました。場所を移して呼びかけたものの、何人くらい集まるだろう？ と不安でしたが、花の申し込み人数が45名と聞き、驚いて準備しました。地区の世話人が復興住宅全戸に呼びかけてくださったおかげで、新しい参加者が20名以上も増えたのです。



12月16日、新たな場所となる公共ゾーン第3集会所で、初めての会が開かれました。初めての



集会場が綺麗な花で彩られました

の参加者は、緊張気味です。まずは、生け花を行いました。花器の代わりとなるマグカップやお花が配られると、心配や緊張が徐々にほぐれてきます。参加者がのびのびできるように、スタッフも困って手が止まった人にだけ声をかけて上手に教えます。自分らしさが出る生け花が完成に近づくと、気持ちも華やかになります。殺風景だった集会所は、美しいお花畑になりました。「お花に負けない笑顔で」ハイポーズ。笑顔の写真を一人ずつ撮りました。写真は、次回、お渡しする予定です。

全体の気分が和らいだところでお茶っこです。お菓子やみかんを食べながらおしゃべりタイム。楽しい話も生活の愚痴も出て、話の輪が広がります。まだ新しい参加者と以前からの参加者は、お互いに遠慮しているようでした。

各地の教会から支援していただいたプレゼント（着物や手編みの靴下など）をジャンケンで配りました。「最初はグー」の声がだんだん大きくなってきます。勝っても負けても笑い声と歓声があがります。リーダーの手に皆が集中していき、会場が一体化していきます。「また負けた！！」と笑い声が出る度に全体がひとつになっていきました。



プレゼントのかかったジャンケン大会に皆さん夢中です

私たちは、初めての被災者とうまく打ち解け合えるのか心配しましたが、地区の世話人が、遠い復興住宅の人たちには、車を乗り合わせて集まるように配慮してくれたこともあり、以前の集会場では20名足らずの参加者が、新しい地域の人を加えて倍増しました。そして、「こんなに楽しいとは思わなかった」「また来たい」と多くの人に好評でした。

今回参加してくださった方々は、福島・山元町・亘理町のそれぞれの地域で被災された方や地元の被災していない人がいたようです。「あの人は被災していないのに…」とつぶやく人もいました。地元の人と被災した新しい住人が、相互に信頼できるようになるには、時間がかかりそうですが、私たちもそれぞれの方々と心を開いてゆっくりと歩んでいきたいと考えています。

次は、1月13日、27日と約束してお別れしました。



公共ゾーン第3集会所の入口及び内部

## 紙芝居「きれいな目」

カトリック東仙台教会 阿部 正子

2015年10月に、私の郷里の福岡県久留米市に帰省の折、カトリック今村教会において、東日本大震災での被災地の悲しみや、ボランティア活動を描いた紙芝居「きれいな目」を拝見する機会に恵まれました。震災当時のことが走馬灯のようによみがえってくる中に、被災地から遠く離れている九州の方が上演されていることに感動を覚えました。

この紙芝居を制作された方は、私の妹の高校の同級生で、福岡県小郡市立小郡小学校の教諭をされている福田洋一さんです。福田さんは2013年のある日、同じ町内にお住いの成富さんから、ご子息の真介さんが被災地の宮城県南三陸町で2011年から2年間にわたりボランティア活動をされたお話を聴かれました。

真介さんは、震災発生から3か月後に南三陸町に入り、瓦礫撤去、支援物資の受け取りや配布といったボランティア活動、潜水士の資格を取得して海中の瓦礫撤去や漁の障害物などの海中調査、さらに2012年5月からは行方不明者の捜索に携わり、町役場職員・警察・ボランティアと合同捜査をし、多くの遺骨を探し出し、宮城県警に届けているという内容でした。



福田さんのお話を聴く（左から2番目が阿部正子さん）

心を打たれた福田さんは、学校の道德の授業で紹介したいとの気持ちが沸き上がり、それから1年をかけて準備をされ、紙芝居「きれいな目」が出来上がりました。早速に小郡小学校4年生の授業に使用したところ、子どもたちの感想文から被災地の様子やボランティア活動について理解してもらうことができたと言っておられました。「きれいな目」とは、福田さんが成富真介さんに取材した折の、成富さんのきれいな目が印象に残り、それを題名にしたということです。そして、真介さんは現在、宮大工の修業をされているそうです。

紙芝居「きれいな目」は、福田さんの友人たちを通して公共機関をはじめとして、いろいろなところに広まりつつあります。妹は英文に翻訳し、勤務先の八女学院高校で英語の授業に取り入れたところ、生徒たちは命の大切さやボランティア活動について考えたそうです。

東日本大震災から5年近くが過ぎ、遠く離れた地域では被災地のことが忘れ去られそうになっている昨今、この紙芝居「きれいな目」の存在の意義を感じます。命の尊厳、人の心の優しさ、奉仕の精神、防災について改めて深く考えさせられます。



12月になって、妹より私のところに紙芝居「きれいな目」（日・英訳）が2部贈られてきました。1部は、私の属する東日本大震災で被災した女性たちの体験を、写真と声で発信する「フォトボイス・プロジェクト」活動の指導者で、米国ミシガン大学の吉浜先生に活用していただけるように差し上げました。そして私は、友人たちと紙芝居の時を持つようになりました。そのたびに、月一度ながら参加させていただいている石巻ベースのひびき仮設住宅のカリタスお茶会において、そこで出会う各地からのボランティアの方と共に心を合わせ、これからも寄り添いの絆を深めていくことを大切にしていきたいとの気持ちに導かれます。同じように今もなお被災地で活動されているボランティアさん方に、被災者でもある私たちは感謝です。そして、「すべては、時にかなって美しい」（聖書・伝道の書・3章11節）の言葉の下に行動されている福田洋一さんとの出会いも、神さまのお計らいと感謝しております。



紙芝居を聞かせてくださった福田洋一さん

## 仙台小教区での活動

仙台教区サポートセンター 長谷川 昌子

仙台市内の小教区は、自分たちも被災したが、自分たちよりも、もっと大きい被害を受けた人がいる、その人々のために、他県から来て支援して下さるボランティアさんだけに任せるのではなく、自分たちも何かすべきだという思いから、仙台市内や県内各地域の応急仮設住宅の人々への「お茶っこ」傾聴活動を中心に支援活動を続けてきました。

しかし、仙台市内の仮設住宅入居者は、2011年3月末のピーク時には、約1万2千世帯でしたが、住まいと暮らしの再建が徐々に進んできたことにより、2015年10月1日現在では、仮設住宅入居者は約5千世帯に減少しています。

それに伴い、一本杉教会、元寺小路教会、北仙台教会、西仙台教会、東仙台教会、畳屋丁教会、八木山教会、塩釜教会、の各ボランティアグループは、ある仮設住宅では「お茶っこ」の活動は中止され、ある教会のグループは、復興住宅でのコミュニティ作りのために「お茶っこ」を頼まれるなど、その動きはいろいろで、被災者のために何をするのがいちばんいいのか、どの教会も模索中です。

それに伴い、11月26日（木）午後6時半から、カトリック一本杉教会において、仙台や県内の仮設住宅でお茶っこを柱に、東日本大震災で被害を受けた被災者に寄り添い活動が続けている小教区の担当者が集まり、仙台市の保健師さんのお話を聞く会が開催されました。

これまで、自由な形でミーティングを開いてきましたが、今回は3回目。仮設住宅から復興住宅へ移っている現段階のステージの中で、自分たちのしてきたことを振り返り、先へ進むために、講師をお招きしての会合が開かれました。

講師は若林区役所の家庭健康課主幹で保健師の木村ミカナさん。

はじめに仙台市の復興状況の最新情報について市が作成した＊資料に沿って説明がありました。

（＊この資料は仙台市のホームページに掲載されており毎月更新されています「仙台市復興レポート」 仙台市復興事業局震災復興室作成）



お話をしてくださった木村ミカナさん（左端）

お話のおもな内容は、以下の通りです。

### 仮設に取り残された人々

今年は、復興の最終年度と言われます。しかし、人々の気持ちは落ち着いていません。その中でも、一人暮らしで生活が厳しい人には、社協、民生委員などで支援しています。

今は引っ越しのピークです。仮設に住んでいる人は、半数以下になっています。この人々は、自分たちが、取り残されたように感じています。また防犯上不安を感じています。その残っている人々はどういう人かという、高齢者と障害者です。次をどう決めるかが不安な人には行政として一緒に考えてあげるよう支援を行っています。しかし、今後、自分がどういう生活をしたらいのかイメージできない人がおり、地域の市民のサポートが必要です。そういう方には、寄り添いながら話を聞いていくようにしてください。そして、接していてちょっと心配だなと思われる人については行政に情報を提供してください。

私たちがお手伝いできることもあると思います。

## 問題点

### 1. アルコール依存症者の問題

震災前は周囲の目にとまらなかったけれど、狭い仮設住宅ゆえに問題が顕在化してきたというケースがあります。復興公営住宅に移ればまた新たな問題となっていくでしょう。社会のなかで周囲とうまくやっていけない人がおります。こういった方々の支援には「地域のネットワーク」が必要です。

### 2. 高齢者で独居生活をしている人

あの人はちょっと気になる、という人がいるとき、仮設住宅では目が届きますし、様子がわかります。これが復興住宅となると見えなくなってしまう、「助けて」の声が出せない、聴こえないということになります。行政としては「町内会づくり」、「集会所での交流会や健康講座」の開催などが必要だと考えています。

住民の方々と話をしていて、若林区内でも（開発の関係で）地域間で交通の便に違いが生じ、若い人が去ってしまい、高齢者が多く、取り残されたという思いが強い地域が生じてきているように感じます。今後どう生活していったらよいのかを一緒に考えてあげなければなりません。

皆さまには、ぜひ、取り残されたと感じて生活している人々の話をじっくり聞いてほしいと願っています。そして、区役所にも連絡していただけたらと思います。

この後、仮設住宅の入居期限、復興公営住宅の集会所の使用についてなど質疑応答が行われました。復興公営住宅に入られた方々との「お茶会」などの支援活動については、それぞれの住宅の自治会と話し合って希望に応じてやっていっていただけたらよいでしょうとのお話がありました。

有意義なお話を聴けて、参加者一同、協力しながらボランティア活動を続ける元気をいただき、次回の会合を期待しつつ散会しました。

